

現代日本語の親族内における呼びかけ語の実態調査 —大学生を中心に—

呉 惠卿

1. はじめに

相手をどのように呼ぶのか、あるいは呼ばれるのかということは、話し手と聞き手の人間関係を定義し交渉する重要な手段である。相手を呼ぶために用いる呼称語⁽¹⁾は、ことば共同体 (speech community)⁽²⁾ で長年にわたり構築された言語的・社会的・文化的特殊性を反映しており、そのことば共同体の社会文化的な知識が無ければ、適切な呼称語を見つけて使用することはなかなか難しい。このような理由で呼称語は社会言語学の分野で最も関心が寄せられた研究テーマの一つである。

呼称語に関する研究は、力 (power) と連帯感 (solidarity) という 2 つの尺度を用いて呼称語の使用を考察し、言語使用と社会との相互関係を明らかにしようとした Brown & Gilman (1960)、および Brown & Ford (1964) の研究以来、社会言語学の分野で積極的に取り上げられてきた。本稿の対象である日本語の呼称語の初期研究に、人称代名詞や親族名称の用例を外国語と比較し、ことばが文化と社会の構造によって影響を受けることを解明しようとした鈴木 (1973) がある。鈴木 (1973) では、話し手が自分自身について言及する言葉を総称する「自称詞 (terms for self)」と、話し相手について言及する言葉を総称する「対称詞 (address term)」という用語を使って日本語の呼称体系について説明し、このうち、「対称詞」が相手を称する名詞に該当すると述べている。鈴木 (1973) では、さらに「対称詞」を、「お父さん!」のように、実際相手に呼びかける際に用いる「呼格的用法 (vocative use)」と、「お母さんなんて嫌い」のように、話の中に登場する人物を指す「代名詞的用法 (pronominal use)」に分けている。鈴木 (1973) 以来、日本語の呼称を取り上げた多くの後続研究では似たような用語または分類が用いられている。

一方、他言語圏でも呼称に関連する研究が活発に行われており、呼称語の定義や分類について工夫が行われてきた。Fasold (1990) は Schegloff (1972) を参考に、「呼称 (address form)」を「話者が相手を指名するために用いる言葉」とであると定義し、「呼びかけ語 (summonses)」と区別している。すなわち、「呼称 (address form)」は、話し手が聞き手の注意をすでに得ている時に用いるもので、「呼びかけ語 (summonses)」は聞き手の注意を得るために用いる言葉であるということである。しかし、呉 (2013) でも指摘するように、実際に会話の場面で相手の注意を得ているのかどうか、呼びかけるために使っているのか、それとも言及するために使っているのかをはっきりと区別するのはそれほど簡単ではない。本稿では、話し相手に呼びかけるために用いる言葉や表現をすべて「呼びかけ語」として定義し、日本の大学生は自分の親族をどのように呼びかけているのかについて分析と考察を行う。

本研究は、将来的に日本語と韓国語の対照研究を念頭において、その予備調査として

行われた。筆者がこのテーマに興味を持つことになったきっかけは、日本人と国際結婚をしたある韓国人女性が、夫の親族の集まりで経験した「驚きごと」について語ったことである。韓国ということば共同体では、家族関係や親族間の血縁の距離を表す、いわゆる「촌수 (寸数)」などによって親族の呼び名が細かく厳しく定められており、いくら親しくても目上の親族に「名前」や「呼び捨て」のような呼び方をしてはいけないという言語社会的規範が存在する。そして、その規範に反するような言語行為は、最悪の場合、人間関係の崩壊をもたらすこともある。しかし、その親族の集まりで、日本人の親族たちは様々な呼び方で目上の親族に呼びかけており、彼女は十分混乱を感じたのである。彼女の経験談を聴いて、筆者は親族内における日韓の呼びかけ語の使用実態と様相、及びそれに影響する要因について調査を行ってみたいと考えた。本稿では、対照研究を行うための予備調査として、先ず日本の大学生を対象に親族内呼称語の使用実態に関するアンケート調査を実施し、その調査に基づいて分析と考察を試みる。

2. 先行研究

本稿の分析対象である呼びかけ語に注目し、呼びかけるために用いられている表現を細かく分類したものに今村 (1996) がある。今村 (1996) では、呼びかけ表現を、代名詞による呼び方 (Pronouns of Address) (あなた、お前、など)、動詞形に表された呼び方 (Verb forms of Address) (来なさい、おいで、など)、名詞による呼び方 (Nouns of Address) の3つに分け、さらに名詞による呼び方を、①個人名 (Personal Names)、②親族用語名 (Kinship Terms)、③敬称 (Mr/Ms forms)、④称号 (Titles)、⑤職業名 (Occupational Terms)、⑥ニックネームやあだ名で呼ぶ愛称 (Nicknames)、⑦愛情の呼びかけ (Forms of Endearment)、⑧ Sir・Ma'am と「だんな」・「奥さん」など、見知らぬ人や店の客などに対して呼びかけるときに使われるもの、⑨ (Your) Excellency と「閣下」など、身分の高い人物に対して用いられるもの、⑩人間関係を表すもの (「友達」・「同僚」・「先輩」・「お隣さん」)、に分けてそれぞれ細かく用例を提示している。本稿では、このうち、「名詞による呼び方」を中心に分析及び考察を行う。

これまで日本語の呼称語について言語生活または社会言語学の観点から多くの研究が行われてきた (柴田, 1982; 鈴木, 1973, 1978, 1979, 1998; セペフリバディ, 2012; 谷, 1974, 1978; 渡辺, 1978 など)。本稿の分析対象である日本語の親族内呼称に関連する先行研究のうち、本稿に関わるいくつかの研究を次に紹介する。

まず、日本語の呼称語における先駆的研究である鈴木 (1973) では、日本語の親族内の呼称に大きく影響している要素として目上、目下という尺度をあげている。鈴木 (1973) によると、目上の親族に対しては通常、「お父さん」や「お母さん」のように親族語を用いて呼ぶが、目下の親族に対してはそれができない。なお、目上の親族に名前だけで呼びかけることはできないが、目下の親族に対しては可能である。次に、言語生活という観点から日本語の親族語彙についての調査を行い、日本の伝統的な社会や文化の構造との相関関係を解明しようとしたものに渡辺 (1978) がある。渡辺 (1978) では、日本語の親族語を「個人親族語」、「家・家族親族語」、「家の系譜親族語」、「個人・家親族語」、「家・家族内地位親族語」、「親族全体語の」6つに細かく分け、各項目につ

いて用例を提示している。渡辺（1978）によると、年少期に、親族によって獲得された呼称語は生涯にわたって根強く残存する傾向がある。なお、父・母・祖父・祖母といった個人親族語は種類が多く、言及としては使えるが、呼びかけるためには使えない。最後に、日本語の親族語彙の使用を「呼びかけ語（address term）」と「言及語（reference term）」⁽³⁾に分けて考察した柴田（1982）によると、「言及語」には男女差が、「呼びかけ語」には上下関係が働いている。

比較的最新の研究で日本語の親族内呼称の実態に迫った調査にセペフリバディ（2012）がある。セペフリバディ（2012）では、日本の小中高大学生及び社会人各 25 名を対象にアンケート調査を実施し、家族に呼びかける際の呼称表現を話し手と聞き手の世代差や性差を中心に考察している。セペフリバディ（2012）によると、話し手は目上に相当する父母、祖父母に対して主に親族呼称を使用しているが、兄姉に対しては、親族呼称以外に、名前・あだ名・人称代名詞という 3 種類の呼びかけ語を用いている。なお、話し相手に対して聞き手が目上であればあるほど、話し手による親族呼称の使用は減少し、より多様な呼称が用いられる傾向がある。特に目上の兄弟に対しては親族呼称の代わりに名前や人称代名詞で呼びかけるなど、部分的には鈴木（1973）の説にあてはまらない事例も存在すると述べている。母集団が 25 名と少ないため、その結果を一般化するには無理があるが、時間の経過につれて切り替わっていく呼称語の変化の様相に着目したという点で興味深い。

日本語の親族内呼称語を取り上げたこれまでの研究のうち、「目上・目下」という尺度が、親族に対する呼びかけ語において重要な要因として働いているという鈴木（1973）の仮説は 40 年が経った今でも説得力をもって多くの研究で引用されている。ただ、セペフリバディ（2012）でも指摘するように、大分時間が経過した昨今、家族関係の変化など、様々な社会的な変化は、親族に対する呼びかけ語の使用にも影響を与えている。特に、加速化するグローバル化とデジタル環境は我々の生活にも大きく影響しており、これを受けて日常の言語使用も有機的变化を続けている。そして、このような変化は話者間の人間関係を定義し交渉する呼称語や呼びかけ語にも浸透している可能性があり、定期的な調査によってその実態に迫る必要がある。また、これまで親族内における呼びかけ語を取り上げた最近の研究では、その対象が祖父母・父母・兄弟姉妹に限られており、父母の兄弟やその配偶者については取り上げていない。本稿では、約 10 年前に行われたセペフリバディ（2012）の大学生を対象に行った調査の箇所を補強する形で、祖父母と父母、兄弟姉妹以外に、父母の兄弟姉妹およびその配偶者まで調査範囲を広げ、日本語の親族内呼称語の用例を収集し、言語使用という側面から現代日本語の親族内における呼びかけ語の実態を明らかにしたい。

3. 調査の概要

先行研究にもあるように、日本語の親族内における呼びかけ語は話し手の年齢とともに変わっていくことがある。したがって、親族内の呼びかけ語の全貌を把握するためには、様々な年齢層を対象に調査を行う必要があるが、本稿ではデータ収集の容易さから、先ず大学生を対象に調査を行った。調査期間は、2022 年 6 月 27 日から 29 日の 3 日間で、

東京に所在する A 大学で筆者の授業を受講している学生を対象に調査を行った。調査を実施する前に、研究の趣旨と目的について説明し、調査に参加を希望する大学生 61 名⁽⁴⁾〔男子学生 6 名、女子学生 55 名〕を対象に合計 29 項目についてアンケート調査を行った。その項目のうち、本稿では祖父母・父母・兄弟姉妹⁽⁵⁾・父母の兄弟姉妹とその配偶者に対する呼びかけ語を中心に分析結果を提示する。

アンケート調査の実施にあたって、実際当事者に向かってどのように呼びかけているのかを書くように指示した。アンケート調査においては、できる限り多様な選択肢を設定するよう試み、複数選択を可能にした。なお、該当する呼びかけ語が無かった場合、追加で記入するよう依頼し、該当する親族がいない場合は回答しないように指示した。

次に、祖父母、父母、兄弟姉妹、父母の兄弟姉妹とその配偶者に向けて親族語彙を使用しないと回答した場合、自由記入欄を設定し、その理由を書いてもらった。さらに、呼びかけ語と特定地域の居住経験の相関関係があるかどうか参考にするために、現在の居住地およびこれまで住んでいた地域を書いてもらった。最後に、呼びかけ語の使い方に親密度が関係しているのかどうか調べるために、祖父母、父母、兄弟姉妹について同居しているかどうかについても書いてもらった。今回の調査では女子学生の方が圧倒的に多かったため、性差による量的分析などは行っていない。

4. 分析

日本の大学生を対象に実施した、親族内における呼びかけ語の使用実態をまとめたものが表 1 である。

表 1 で提示した呼びかけ語は、以下の通りにいくつかの範疇に分けることができる。

- ・ (定型の) 親族語彙: 「おじいさん」、「おじいちゃん」、「じいちゃん」のように親族関係にある相手と呼ぶ時に一般的に用いられる親族名称。「じいじ」、「じーじ」、「じゅーじゅ」など、親族語彙から派生したと見られる幼児語、または「名前＋おじいちゃん」のように、名前や名前の一部を親族名称に付けたものも含む
- ・ 名前＋敬称: 名前や名前の一部に「さん」、「ちゃん」、「君」の敬称をつけたもの。幼児語の「たん」を付けたものも含む
- ・ 呼び捨て: 名前や名前の一部に「さん」、「ちゃん」、「君」の敬称をつけていないもの
- ・ あだ名: ニックネーム、または名前の一部を変形させたもの
- ・ 定形外の親族語彙: 祖父に対して「パパ」と呼ぶなど、親族関係にある相手に対して一般的に用いられていると見られない親族名称。「名前＋ねえさん」のように名前をつけたものや、「ねえね」のように親族語彙から派生したと見られる幼児語も含む
- ・ その他: 「いとこ名前＋ママ」や「名前＋旦那＋さん」、外来語の「Mommy」、「Daddy」など、上記外のもの

表 1 に基づき、以下に、祖父母、父母、兄弟、その他の親族の順にどのような呼びかけ語が使用されているのか見ていく。

今回の調査によると、祖父に対して「おじいさん」は見られず、より親しい敬称の「ちゃん」をつけた「おじいちゃん」、「じいちゃん」が多く見られた。なお、名前にこれらの

表1 親族に対する呼びかけ語

	男	女
祖父	おじいちゃん、じいちゃん、じいじ	おじいちゃん、じいちゃん、じいじ、じーじ、じじ、じゅーじゅ、じじちゃん、おじいちゃま、名前+おじいちゃん、名前+じいちゃん、名前+君、パパ、あだ名
祖母	おばあちゃん、ばあちゃん、ばあば、あーちゃん	おばあちゃん、ばあちゃん、おばあちゃま、おばちゃん、ばあば、ばーば、おばば、ばば、ばばちゃん、名前+おばあちゃん、名前+ばあちゃん、名前+ちゃん、名前+さん、ママ、あーちゃん、あだ名
父	おとうさん、パパ、パー、おやじ	おとうさん、パパ、おとうさま、とうさま、とうさん、とうちゃん、とうたん、とと、Dad、Daddy、あだ名
母	おかあさん、ママ、マー	おかあさん、ママ、Mom、Mommy、かあさん、おかあさま、かあさま、あだ名、名前[呼び捨て]
兄		おにいちゃん、名前[呼び捨て]、名前+君、にいに、あにき、あだ名、名前+おにいちゃん
姉	おねえちゃん、おねえ	おねえちゃん、名前[呼び捨て]、名前+たん、名前+ちゃん、名前(の一部)+ちゃん、あだ名
弟	名前[呼び捨て]、名前省略+君	名前[呼び捨て]、名前+君、あだ名
妹	名前[呼び捨て]	名前[呼び捨て]、名前(の一部)+ちゃん、あだ名
父の男子兄弟	名前+おじちゃん、名前+にいちゃん、名前+おーじ、名前+君	おじさん、おじちゃん、名前+おじちゃん、名前+おじさん、居住地+おじさん、名前+にい、名前+さん、名前+君、あだ名+おじちゃん、名前+にいに、おにいさん、あだ名
父の男子兄弟の配偶者	名前+さん、名前+ちゃん	おばさん、おばちゃん、名前+さん、名前+ちゃん、名前+おばちゃん、あだ名
父の女子兄弟	おばさん、名前+さん	おばさん、名前+ちゃん、いとこ名前+ちゃん+のお母さん、名前+おばさん、名前+おばちゃん、おねえさん、名前+ねえ、あだ名
父の女子兄弟の配偶者	おじさん、名字+君、名前+君	名前+さん、名前+君、おじさん、名前(の一部)+おじ、おっちゃん、名前(の一部)+さん、おじちゃん、名字+さん、いとこ名前+ちゃん+のお父さん
母の男子兄弟	名前+にいちゃん、名前+君	おじさん、おじちゃん、おっちゃん、名前+おじさん、おじ、いとこ名前+パパ、あだ名+パパ、名前[呼び捨て]、にいに、名前+さん、名前+君、名前+ちゃん、名前+おじちゃん、名前+にいに、あだ名、おにいさん、あだ名+おじさん、
母の男子兄弟の配偶者	名前+さん	おばさん、おばちゃん、おば、名前+おばちゃん、名前+ちゃん、名前+さん、いとこ名前+ママ、名前+ねえね、
母の女子兄弟	おばさん、名前+おばちゃん、名前+さん、あだ名	おばさん、おばちゃん、名前+おばちゃん、名前+さん、名前+ちゃん、いとこ名前+ママ、おねえさん、いとこ名前+のお母さん、名前+ねえね、あだ名
母の女子兄弟の配偶者	おじさん、名前+さん、あだ名	おじさん、おじちゃん、いとこ名前+パパ、名字+さん、いとこ名前+ちゃん+のお父さん、名前+さん、名前+君、叔母名前+旦那+さん、あだ名

親族名称をつけた「名前＋おじいちゃん」や「名前＋じいちゃん」という呼び方も見られた。また、親しみを込めた敬称の「ちゃん」に「さま」を結合し敬い親しむ気持ちを表す「じいちゃま」や、「おじいちゃん」の幼児語にあたる「じいじ」、「じーじ」、「じじ」、「じゅーじゅ」、などの例も見られた。そのほか、「名前＋君」やあだ名、祖父に一般的に使用されない「パパ」と回答したものがあつたが、全て女子学生にのみ現れていた。全体的に女子学生の方でより多様な形の親族名称が見られたが、今回の調査参加者に男子学生の方がわずか6名で圧倒的に少なかったのがその原因である可能性もある。このような傾向は全体を通して現れている。そのほか、特定の呼びかけ語を使用する理由については、「まわり（の家族）がそう呼んでいたから」と書いた回答者が全体を通して多く、渡辺（1978）でもあるように、呼び方は、周囲の影響や幼い時期に定着した習慣による傾向があると考えられる。

次に、祖母については、祖父の場合と同じく、「おばあちゃん」、「ばあちゃん」のほか、「おばあちゃま」などの親しみを込めた敬称をつけたもの、これらに名前をつけたもの、「ばあば」、「ばーば」、「おばば」、「ばば」、「ばばちゃん」など、幼児語にあたるものが見られた。「おばあさん」と回答した人はいなかった。また、「ばあちゃん」から「ば」をとった「あーちゃん」など、変形された形の親族名称もあつた。なお、「名前」に「さん」や「ちゃん」といった敬称をつけたもの、あだ名、祖母でなく母に対して用いる親族名称の「ママ」と回答した人もいた。そのほか、「おばちゃん」と回答した女子学生がいるが、この呼び方に対する特記がないことから、「おばあちゃん」の誤記でないと思われる。

父については、「おとうさま」、「おとうさん」、「とうさま」、「とうさん」、「とうちゃん」のほか、「パパ」、または「パパ」の変種の「パー」や、「とうさん」の幼児語にあたる「とうたん」、「とと」などが見られた。また、くだけた場面で男性が父親を親しんで呼ぶ際に用いる「おやじ」という回答も男子学生から見られた。そのほか、海外居住の経験がある女子学生で、「Dad」、「Daddy」と回答した人がいた。親族名称以外に、「あだ名」と回答した人も1名見られた。

母については、「おかあさま」、「おかあさん」、「かあさま」、「かあさん」のほか、「ママ」、または「ママ」の変種の「マー」、父の場合と同じく海外滞在の経験者に限って、「Mom」、「Mommy」という回答が見られた。親族名称以外に、「あだ名」、「（名前の）呼び捨て」を用いると回答したのは各1名で、全て女子学生であつた。

兄弟姉妹の場合、少子化の影響で、祖父母や父母に比べて回答者が少ない。まず、兄については、「おにいちゃん」、または、これに名前をつけた「名前＋おにいちゃん」のほか、「おにいさん」の変種にあたる「にいに」、そして「あにき」が見られた。そのほか、「名前」に敬称の「君」をつけたもの、または「（名前の）呼び捨て」、「あだ名」などが見られた。今回、男子学生の回答者はいなかった。

姉については、親族名称の「おねえちゃん」、「おねえ」のほか、名前やその一部に敬称の「ちゃん」、またはその幼児語にあたる「たん」をつけたものが見られた。また、「呼び捨て」や「あだ名」で呼びかけているという回答もあつた。「おねえちゃん」から敬称をとった「おねえ」は男子学生の方で見られた。

弟については、名前やその一部に敬称の「君」をつけたもの、または「呼び捨て」が

最も一般的に現れ、そのほか、「あだ名」も使用すると回答していた。

妹については、弟の場合と同じく、名前の一部に「ちゃん」をつけたもののほか、「呼び捨て」や「あだ名」で呼びかけている回答していた。

祖父母、父母、兄弟姉妹の場合、目上の家族に対して用いる呼びかけ語の方がよりバラエティーに富んでいる。その理由として、目下に対しては親族名称が使用されていないのに対し、目上に対しては親族名称が使用されており、且つ、その親族名称の変種も多数存在しているということがあげられる。

今回は、父母の兄弟やその配偶者についても調査を行っているが、父の男子兄弟については、親族名称の「おじさん」、「おじちゃん」や、名前やあだ名、または該当親族の居住地にこれらの親族名称をつけたものが見られた。また、「おじ」の変種と見られる「おーじ」があるが、単独でなく名前につけて使用すると回答していた。なお、名前に敬称の「さん」または「君」をつけたものが多く見られた。興味深いことは、「おにいさん」や「おにいちゃん」、「にいちゃん」またはその幼児語にあたる「にいに」、「にい」など様々な形の変種が「定形外の親族語彙」として用いられているということである。単独で使用されている場合もあるが、多くの場合、名前につけて使用すると回答していた。そのほか、「あだ名」の使用も見られた。

母の男子兄弟については、「おじさん」、「おじちゃん」やその変種の「おっちゃん」、これらより敬称を省略した「おじ」、または名前やあだ名にこれらの親族名称をつけたものが見られた。そのほか、名前に敬称の「さん」、「君」、「ちゃん」をつけたものがある。また、該当親族は自分からみると、いとこの父にもなるため、いとこの名前に「パパ」をつけたものもあった。父の男子兄弟と同じく、「おにいさん」や「にいちゃん」またはその幼児語にあたる「にいに」、「にい」など様々な形の変種が「定形外の親族語彙」として用いられていた。単独で使用されている場合もあり、名前につけて使用する場合もあった。さらに、「パパ」が「あだ名」と結合し「定形外の親族語彙」として用いられていた。「あだ名」と「呼び捨て」の使用も見られた。

では、父母の女子兄弟の配偶者にはどのような呼びかけ語を使用しているのだろうか。まず、父の女子兄弟の配偶者については、「おじさん」、「おじちゃん」、「おっちゃん」といった親族名称、または名前の一部に「おじ」をつけたものが見られた。父母の兄弟に比べ、名前と結合する形でなく、単独形で使用すると回答した人が比較的多かった。また、名前やその一部に敬称の「さん」、「君」をつけたもの、名字に「さん」や「君」をつけたものが見られた。そのほか、「いとこ名前ちゃん+のお父さん」という回答も見られた。父母の兄弟については「定形外の親族語彙」が様々な変種で使用されていたのに対し、父の女子兄弟の配偶者に対して「定形外の親族語彙」は見られなかった。「あだ名」を使用すると回答した人もいなかった。

母の女子兄弟の配偶者については、「おじさん」、「おじちゃん」といった親族名称、または名前に「おじさん」をつけたものが見られたが、父の女子兄弟の配偶者と同じく、単独形で使用する場合が多く見られた。なお、名前やその一部に敬称の「さん」、「君」をつけたもの、名字に「さん」をつけたものが見られた。そのほか、「いとこ名前ちゃん+のお父さん」または「いとこ名前+パパ」という回答も見られた。「叔母名前+旦

那+さん」という回答があったが、実際にあったことがないと特記で書いてあったため、呼びかけ語でなく「言及語」として用いられていたと想定される。父の女子兄弟の配偶者と同じく、父母の男子兄弟に対して用いられていた様々な形の「定形外の親族語彙」は見られなかった。一方、父の女子兄弟の配偶者については一回も見られなかった「あだ名」が使用されていた。

次に、父母の女子兄弟に対して使用していると回答した呼びかけ語について見ていきたい。まず、父の女子兄弟については、「おばさん」や「おばちゃん」、または「名前+おばちゃん」が見られたが、単独形で使用する場合は多かった。また、名前やその一部に敬称の「さん」、「ちゃん」をつけたもののほか、「いとこ名前ちゃん+のお母さん」と回答した人もいた。父の男子兄弟の場合と同じく、「おねえさん」、「名前+ねえ」といった「定形外の親族語彙」が見られた。そのほか、「あだ名」の使用も見られた。

母の女子兄弟については、父の女子兄弟の場合に似通ったような傾向を見せている。親族名称の「おばさん」や「おばちゃん」、または「名前+おばちゃん」のほか、名前やその一部に「さん」や「ちゃん」をつけたものが多かった。なお、親族呼称は単独形で使用する場合は多かった。そのほか、「いとこ名前ちゃん+のお母さん」または「いとこ名前+ママ」という回答も見られた。「おねえさん」、または名前に「ねえね」をつけた「定形外の親族語彙」や「あだ名」の使用も見られた。

最後に、父母の男子兄弟の配偶者について見ていきたい。父の男子兄弟の配偶者については、親族名称の「おばさん」、「おばちゃん」または「名前+おばちゃん」のほか、名前に「さん」、「ちゃん」をつけたものが見られた。親族名称を使用する場合は単独形の方が多かった。そのほか、「あだ名」で呼びかけるという回答もあった。「定形外の親族語彙」は見られなかった。

母の男子兄弟の配偶者については、親族名称の「おばさん」、「おばちゃん」、「おば」または「名前+おばちゃん」のほか、名前に「さん」をつけたものが見られた。また、「いとこ名前+ママ」に加え、「名前+ねえね」といった「定形外の親族語彙」も見られた。

表1の分析結果をまとめると、以下の通りである。

- (1) 血縁的に同じような親族関係にあっても、それぞれ異なる呼び方をする場合がある。
- (2) 他の親族に比べ、祖父母に対して使用される親族語彙の種類が圧倒的に多かった。なお、祖父母の場合、「おじいちゃん」・「おばあちゃん」は見られたのに対し、「おじいさん」・「おばあさん」という呼びかけ語は、今回見られなかった。
- (3) 母に対しては、海外滞在の経験者に限って、「Dad」、「Daddy」または、「Mom」、「Mommy」という英語系の親族語彙を呼びかけ語として使用している回答者もいた。
- (4) 鈴木(1973)でもあるように、目下に対しては親族名称が使用されていないのに対し、目上については親族名称が呼びかけ語として使用されており、且つ、その親族名称の変種も多数存在しているため、祖父母、父母、兄弟の目上の家族に対しより豊富な呼びかけ語が使用されていると考えられる。
- (5) 「定形外の親族語彙」は、父母と兄弟、父の兄弟の配偶者、母の女子兄弟の配偶者を除き、祖父母を含め、全てにおいて現れていた。特に、父母の兄弟姉妹において最も多く現れていたが、父母の男子兄弟に対しては「おにいさん」、父母の女子兄弟に対

しては「おねえさん」からそれぞれ由来した様々な形の変種が用いられていた。このような傾向はその配偶者に対してはあまり見られないか、より控えめに使用される傾向にあった。なお、「定型外の親族語彙」は単独形より、名前につけて使用される場合が多かった。

(6) 父母の兄弟やその配偶者に対して使用する「おじさん」・「おばさん」といった親族語彙は、名前につけて使用されることもあるが、単独形で用いられることが比較的多かった。

(7) 「名字+さん」・「名字+君」は父母の女子兄弟の配偶者にのみ用いられていた。

(8) 兄姉に対しては勿論、母を含めた目上の親族に対しても「呼び捨て」の使用が見られた。

(9) 今回の調査参加者は女性の割合が高く、男性はわずか6名で少なかったということもあり、全体を通して女子学生の方でより多様な形の親族語彙が見られた。

(10) 渡辺（1978）でもあるように、呼び方は、周囲の影響や幼い時期に定着した習慣によるものもある。

日本の大学生が各親族に対して用いる呼びかけ語の使用頻度を見るために、表1に提示したものを上記の範疇別に分けて提示したのが図1から図8までである。

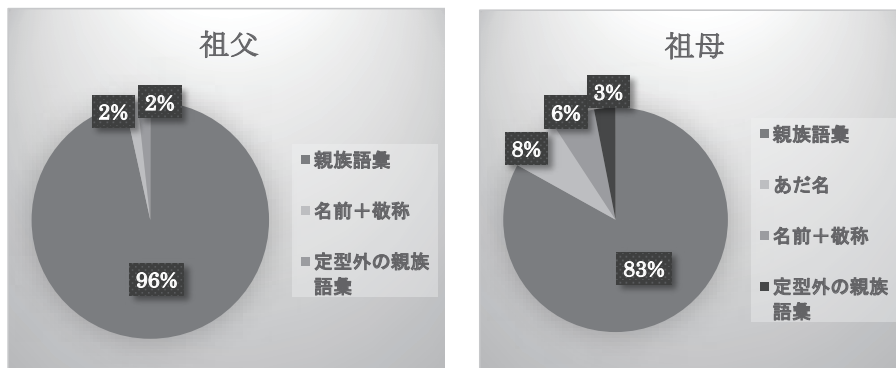


図1 祖父母に対する呼びかけ語

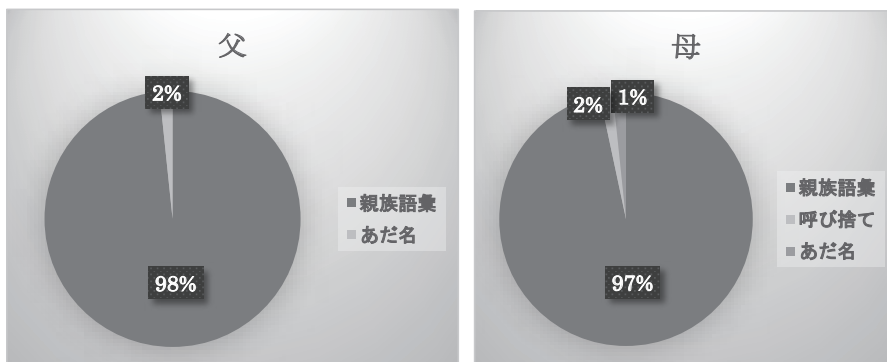


図2 父母に対する呼びかけ語

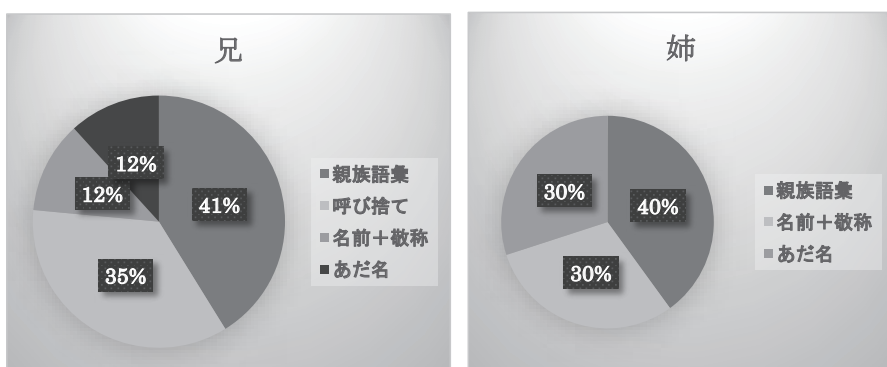


図3 目上の兄弟に対する呼びかけ語

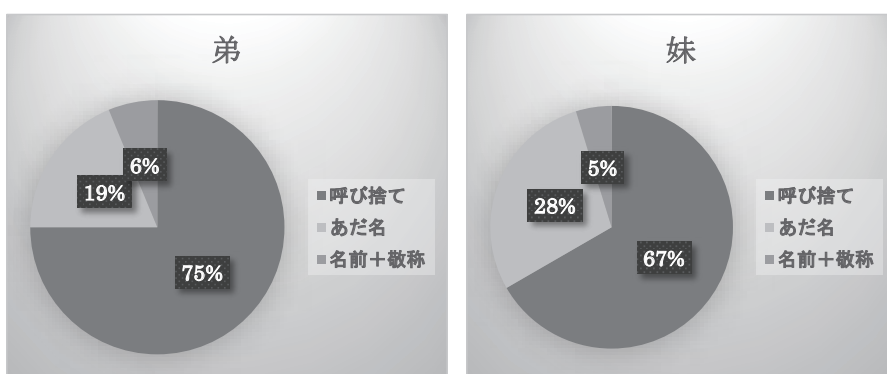


図4 目下の兄弟に対する呼びかけ語

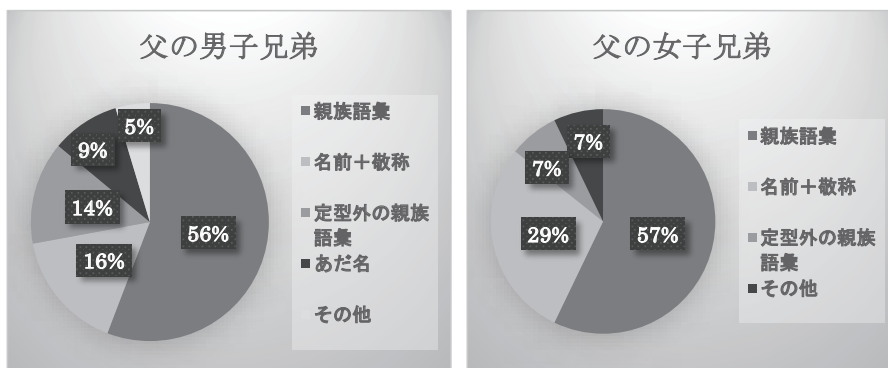


図5 父の兄弟に対する呼びかけ語

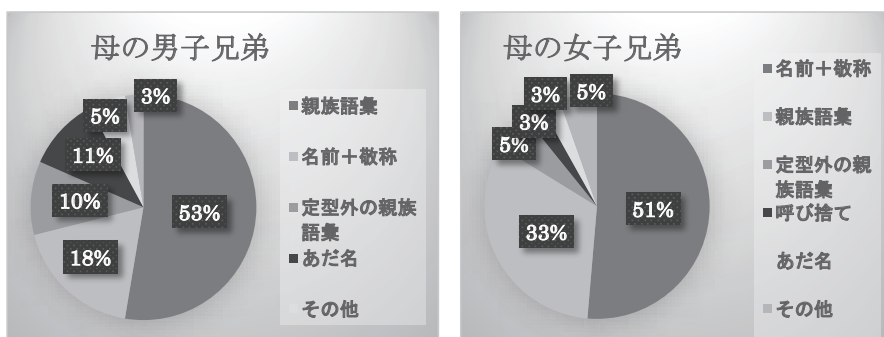


図6 母の兄弟に対する呼びかけ語

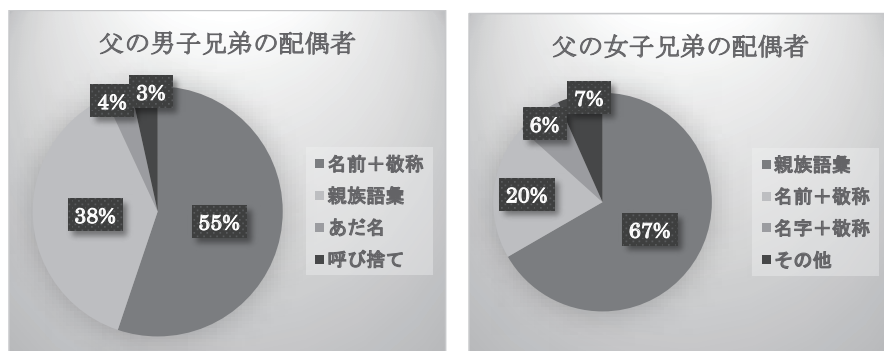


図7 父の兄弟の配偶者に対する呼びかけ語

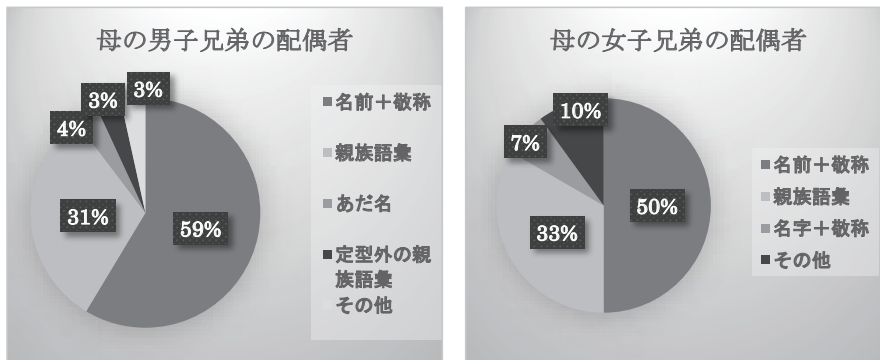


図8 母の兄弟の配偶者に対する呼びかけ語

上記の図1から図8の集計結果から、以下のことがわかる。

- (1) 祖父母・父母に対して、「親族語彙」を用いた呼びかけ語の使用が圧倒的に多い。
- (2) 目上の兄弟に対して、両方において親族名称を用いて呼びかける割合が41%・40%と最も高くなっている。しかし、兄に対しては「呼び捨て」の割合(35%)が高くなっているのに対し、姉に対しては、「呼び捨て」は全く見られず、「あだ名(30%)」の使用が高くなっている。
- (3) 鈴木(1973)にも指摘されている通り、目下の兄弟に対して、「親族語彙」は呼びかけ語として全く使用されておらず、「呼び捨て」の使用が75%・67%と過半数以上を占めている。その次に「あだ名」と「名前+敬称」の順となっているが、妹に対しては「あだ名」の使用が弟に比べて9%、弟に対しては「呼び捨て」の使用が妹に比べて8%ほど、それぞれ高くなっている。目下に使用する2人称代名詞の「お前」や「あんた」なども全く見られなかった。その理由として調査方式の限界があげられる。今回は、呼びかけ語が実際使用されている自然談話でなく、実際の場面を想定して回答してもらうアンケート調査の方式であったため、実際の使用実態を完全に反映していない可能性もある。
- (4) 父母の兄弟に対して、母の女子兄弟以外は全てにおいて「親族語彙」が過半数以上を占めている。その次に、「名前+敬称」となっているが、男子兄弟に比べて女子兄弟に対して10%以上高くなっている。一方、母の女子兄弟に対しては、「名前+敬称」が51%と最も高く、その次に「親族語彙」が33%となっている。そのほか、「定型外の親族語彙」も見られるが、父・母の女子兄弟に比べて父・母の男子兄弟に対してそれぞれ2倍ほど高くなっている。
- (5) 父母の兄弟の配偶者に対して、父の女子兄弟の配偶者以外は「名前+敬称」が過半数以上を占めており、その次に「親族語彙」が3割ほど占めている。母の男子兄弟の配偶者に対してのみ、「定型外の親族語彙」が極めて低い割合で見られる。一方、父の女子兄弟の配偶者に対しては、親族語彙が67%と最も高く、その次に「名前+敬称」が20%となっている。
- (6) 実の兄や姉に対して使用する際は単独形で用いることが多いのに対し、父母の兄

弟姉妹やその配偶者に対して使用する際は、「名前＋親族語彙」の形による使用頻度が相対的に高い。

(7) 低い頻度ではあるが、目上の親族に対しても、「呼び捨て」や「あだ名」の使用が見られる。特に、祖母の場合、「親族語彙」について「あだ名」が8%で2位を占めている。

(8) 「あだ名」は、ほかの親族より兄弟姉妹に対して最も高い頻度で見られる。なお、男子兄弟に比べ女子兄弟に対して、より高い頻度で使用されている。

5. 考察と今後の課題

本節では、アンケート調査の分析結果に基づいて、現代日本語における親族内の呼びかけ語の使用について、先行研究及び回答者が提示した理由などを参照しながら考察を行う。

前節で示した通り、祖父母・父母に対して親族名称で呼びかける頻度がほかの親族に比べて高くなっている。また、呼びかけるために用いられた親族名称の種類もバラエティーに富んでいる。特に祖父母に対してこのような現象が目立っており、その殆どは「おじさん」と「おばあさん」由来のバリエーションである。祖父母に対して使用された「じーじ」や「じゅーじゅ」、「ばば」のような「親族語彙」のバリエーションは、子供の時に用いた幼児語に近い呼びかけ語を大学生になった今でも変えずにそのまま用いているという意味で、話し相手に対する親密さの表現の一種とも受けられる⁽⁶⁾。今回の調査では、祖父に対して「名前＋君」(1名)、祖母に対して「名前＋さん」(2名)・「名前＋ちゃん」(2名)と呼びかけていると回答した人もいる。しかし、鈴木(1973)でも指摘したように、日本で、目上の直系血族を名前で呼びかける習慣は一般的ではないため、名前や名前の一部に親密な敬称をつけて呼ぶ愛称の感覚で、祖父母に対してもやや変形させた形の親族名称で呼んでいると考えられる。

次に、祖父に比べて祖母に対する呼び方の種類がやや多くなっていることに注目されたい。これは、いつまでも若い存在としていたいという女性の美意識とも関係があると思われる。今回の調査で、祖母を親族名称で呼んでいない理由について何名か自由記入してもらったが、「おばあさんと呼ばれたくないから」、「本人にそう頼まれたから」と回答している。そのほか、「あーちゃん」という親族名称のバリエーションを使用する理由についても同様の記述であった。すなわち、祖母の中には、年取った老人をイメージする「おばあさん」と呼ばれたくない人がおり、孫に自分のことを名前やあだ名で呼ぶか、あるいは「おばあさん」から「ば(婆)」を取って、「あーさん」と呼ぶように求めたということであろう。祖母だけでなく、父母の女子兄弟においても似たような現象が見られる。父母の兄弟姉妹について、「おじさん」・「おばさん」といった「定型」の親族語彙以外に、「おにいさん」・「おねえさん」または、これらのバリエーションを用いた、いわゆる「定型外の親族語彙」が使用されており、「呼び捨て」に近いあだ名が用いられることもある。その理由としては、「親がそのように呼んでいたので自分もそれをまねて呼んだのが今も続いている」、「相手にそう呼ぶように頼まれた」と書かれている。「定型外の親族語彙」を用いる理由として最も多いのは、前者の周囲からの影響

である。しかし、後者が理由として書かれたのは、今回の調査によると女性のみである。「おばさん」よりは、若いイメージの「おねえさん」、あるいは若い世代と友達であるかのようなあだ名で呼ばれたいという願望が込められたのではないかと考えられる。これについては、呼ばれる立場の人々に調査を行い、論を裏付けていく必要があるだろう。

そのほか、今回の調査では、母に対して名前のみで呼ぶという「呼び捨て」の事例も見られた。特に海外居住経験が無く、日本で生まれ育った女子学生であるが、ほかの目上の親族に対しては、「親族語彙」や「名前＋敬称」などを用いていた。母に「呼び捨て」をする理由としては、「親しみを感じられるから」と回答している。極めて低い割合ではあるが、鈴木（1973）の「目下の親族に対して名前で呼ぶことは可能であるが、目上の親族を名前だけで直接呼ぶことはできない」という主張に反するもので、これまでの先行研究では見られなかった事例である。目上の兄弟に対しても、鈴木（1973）に反するというセペフリバディ（2012）の調査結果と一致している。興味深いのは、今回の調査で、目上の兄弟のうち、姉に対しては全く見られなかった「呼び捨て」が、兄に対しては高い頻度で見られたということである。今回の調査に参加した学生の9割が女性であり、1割（6名）の男子学生は全員、兄がいなかったため、性差による違いが存在するのかわかることは出来なかった。ただ、姉がいると回答した2名の男子学生も、姉に対しては「親族語彙」で呼びかけており、「呼び捨て」の使用は一切見られなかった。どのような理由で兄にのみ「呼び捨て」が高い頻度で使用されているのか、男子学生も兄に対して「呼び捨て」を使用しているのかどうか、どれほどの割合で使用しているのか、その理由は何かにについては、今後更なる調査を通して明らかにしていく必要がある。

冒頭でも述べた通り、本研究は日韓の対照研究を行うための予備調査として、データの収集が比較的容易な大学生を対象に行われた。今後、年齢層を広げ小中高生に対しても調査を行い、日本語の親族内呼びかけ語の実態を明らかにしていきたい。

注

- (1) 本稿では、相手と呼ぶために用いる言葉や表現をすべて網羅する用語として使用している。
- (2) 言語使用における規範や予測 (expectations) (Yule, 2017)、あるいは言語使用と変種 (varieties)、実践における価値 (values) や態度を共有する人々の集団 (Morgan, 2014)。
- (3) 鈴木（1973）の「呼格的用法 (vocative use)」と「代名詞的用法 (pronominal use)」に似通ったもので、「呼びかけ語 (address term)」は「おじいちゃん！」や「お父さん！」のように、相手に直接呼びかけるために用いるもの、「言及語 (reference term)」は「祖父」や「父」のように、話題に登場する人々を言及するために用いるものをそれぞれ指す。
- (4) アンケート調査の実施前に、参加者は「日本人」に限ると説明し、留学生などは調査対象から外した。ところが、調査後に親族呼称を部分的に「^{チヨン}（叔父）」、「^モ（叔母）」など、韓国語で書いた在日コリアンの回答者が1名おり、その理由について「（叔父が）韓国人だから」と書いてあった。父系の兄弟姉妹にのみ韓国語となっており、そのほかは全て日本語となっているが、国際結婚の影響で日本語の呼称も多

様化していることを裏付ける現象と見られる。これ以外でも、海外滞在の経験などで「Daddy」、「Mommy」という呼び方が見られ、「日本語の親族語」という調査対象に含めるべきどうか迷ったが、本稿では「日本人が使っている言葉」を日本語として定義し、これらをすべて調査対象に含めた。

- (5) 本稿では、「兄弟姉妹」のほか、「男子兄弟」、「女子兄弟」という用語が混在して用いられている。
- (6) 実際に親しい関係にあるかどうかではなく、話し相手と呼ぶときの話し手の意図のことを言う。

参考文献

- 今村洋美 (1996) 「呼びかけ表現」 田中春美・田中幸子 (編) 『社会言語学への招待: 社会・文化・コミュニケーション』 ミネルヴァ書房, 113-124.
- 呉恵卿 (2013) 「韓国語談話における呼称語の役割—話者の談話管理を中心に—」 『教育研究』 55, 157-171.
- 柴田武 (1982) 「現代語の語彙体系」 佐藤善代治 (編) 『講座日本語の語彙〈第7巻〉現代の語彙』 明治書院, 43-47.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 鈴木孝夫 (1978) 『ことばの人間学』 新潮社
- 鈴木孝夫 (1979) 「「呼称選択行動の方法論的考察」をめぐって」 『慶應義塾大学言語文化研所紀要』 11, 165-175.
- 鈴木孝夫 (1998) 『言語文化学ノート』 大修館書店
- セペフリパディ・アザム (2012) 「現代日本語における家族に呼びかける際の呼称表現: 世代差と性差を中心に」 『一橋大学日本語教育研究』 1, 57-72.
- 谷泰 (1974) 「日本語における親族名称の構造分析」 『季刊人類学』 5 (2), 3-36.
- 谷泰 (1978) 「対人関係語分析に関する覚え書」 加藤泰安 (編) 『社会文化人類学: 今西錦司博士古稀記念論文集』 中央公論社, 101-121.
- 渡辺友左 (1978) 「親族語彙の全国概観」 柴田武 (編) 『日本方言の語彙』, 三省堂, 27-42.
- Brown, R., & Ford, M. (1964). Address in American English. In D. Hymes (Ed.), *Language in culture and society* (pp. 234-244). Harper & Row.
- Brown, R., & Gilman, A. (1960). The pronouns of power and solidarity. In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 253-276). MIT Press.
- Fasold, R. (1990). *Sociolinguistics of language*. Oxford: Blackwell.
- Morgan, M. H. (2014). *Speech communities*. Cambridge University Press.
- Schegloff, E. (1972). Sequencing in conversational openings. In J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics* (pp. 346-380). Holt, Rinehart and Winston.
- Yule, G. (2017). *The study of language* (6th edition). Cambridge University Press.

(呉 恵卿—国際基督教大学)